

操業当初、フランス人監督のポール・ブリューナ(1840-1908)とフランス人労働者が血を飲んでいてという噂があったため、富岡製糸場では労働者を探すことが困難だった。この噂は、赤ワインの知識を持ち得ていなかった日本人が、フランス人労働者が赤ワインを飲んでいるのを目にして勘違いしたことで広まった。尾高惇忠(1830-1901)の長女で当時 14 歳だった尾高勇(1859-1923)は、最初の女性工員として手を挙げ、その仕事ぶりは他の工員たちのよい手本となった。製糸場での仕事は若い女性の視力と器用さが求められたため、15～25 歳の独身女性が工員として雇われた。これにより工場で働きたい女性が日本全国から集まり、一時期 400 人の女性工員が雇用された。